

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
森田 <small>おさむ</small> 收	男 性	1 2 歳	新城市向野

この記録は平成24年8月に東愛知新聞社が企画した戦争体験記録、「その時私は小学6年生」に寄稿されたものです。

「豊川海軍工廠の頃」 こうしやう

開戦当初、戦争は日本から遠く離れた外地でのニュースとして伝えられ、日本本土とは無縁のように思いこんでいたので、昭和19年に入り突然多くなった警戒警報・空襲警報のサイレンは、不気味な思い出として残っている。

警報の発令は逐一ラジオで流され、また、町のサイレンが全町民にそれを知らせた。

新城上空を通過する敵機は名古屋市の爆撃に向かうもので、数十機の編隊を組んで飛来し、1時間ほど後に新城上空を通過して南方の基地に帰っていくのだと、何となく分かっていた。度重なる空襲の中で、強く印象に残っている光景が二つある。

一つは、編隊を組んで帰っていく敵機に、浜松の飛行場から飛び立ったと思われる小さな戦闘機2機が、ほとんど垂直に上って飛行機を追う。道路でこれを見ていたおばさんたちが「頑張れ！」と叫んでいたが、編隊の高度に達した途端、2機とも真っ白な煙を引いて垂直に落ちていった。おばさんたちは声にならない声をあげていた。

今一つは、昭和20年8月7日の豊川海軍工廠の爆撃である。8時45分、警戒警報が発令されると30分ほどで空襲警報に変わった。まもなく西の方からドーンという音と地響きが伝わってきた。すぐ工廠の爆撃だと思った。

この時、B29爆撃機を中心に12波に分かれて、3256発の爆弾を投下したといわれる。迎撃の日本戦闘機は1機もなく、敵のはるか下の方で弱々しく炸裂する高射砲の弾幕を見た。わずか30分程の間に、2700人近い犠牲者が出た。新城高女の挺身隊員も20名亡くなり、私の従姉妹も死んだ。爆撃を終えた飛行機は新城上空で南に向きを変え、浜名湖から南方の基地へと退去していった。終戦1週間前の出来事であり、なんとも悔しい一日であった。



新城高女挺身隊出陣の門